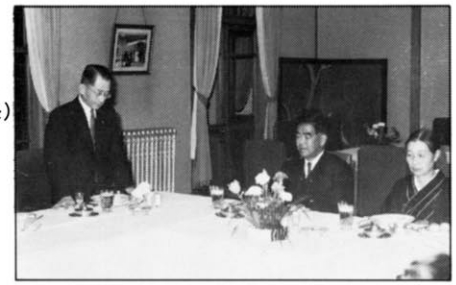
追　憶

高橋公男
(元大和文華館事務局長)



1963. 1 .21　矢代先生 芸術院会員就任
祝賀記念会 /左・高橋公男氏、右・矢代夫人

矢代先生がお亡くなりになってから、早いもので、もう六十余日になります。長いおつき合いでありましただけに、折にふれ、ありし日の先生をお偲び申し上げることの多い今日この頃であります。

美術史家としての先生のお仕事の偉大さについては今更ここに述べるまでもないことですが、美に対してあの瑞々しい情熱を終生持ちつづけられたことは、誠にすばらしいと思います。

先生はよく自分はルノアールが好きだ、あの赤がステキだ、といわれましたが、この若々しい御気持は晩年まで少しもお変りなかったのです。

このことは先生の御高著の何れを拝読してもわかることです。深い御探究の結果を述べつゝも、その行間にあふれる芳香は、何ともいえぬものがあります。

私は、先生こそ、真の美の鑑賞者であり、又先生こそ、得がたい美術史家であられたと思います。

先生は、いつも若草山を正面にみる奈良ホテルの御部屋にお泊りでしたが、いつかここで、先生の文章のお話になりましたおり、ぜひ「奈良隨筆」といったものを書いて戴きたいとお願いしましたところ、自分も、かねがねそう思っているとのお言葉でしたが、遂にその実現をみずに世を去られましたことは、返す返すも心残りなことです。

終りに、私事になりますが、今から十余年前、私のはじめての欧州旅行に際して、スケジュールになかった、フィレンツェを訪ね、又ローマでは数多い美術館の中で特にビラ・ジュリヤを訪ねたのも、先生の強いおすゝめによるものでした。

私があの機会に、この両所を訪ね得ましたことは、その後の私の人生に、どれほどのうるおいと、楽しみを与えてくれたか計り知れぬものがあります。この事を記して、更めて先生の御恩を謝し、心から御冥福を祈り上げる次第であります。(1975. 7 .30記)

矢代先生の代表的著書
「サンドロ・ボティチェリ」３巻

季刊 美のたより No.33
昭和50年 9月1日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.